

【英語】

読書案内

受験のときは、何はともあれ、こういうことが試験にでるから……ということであげられた教材を肅々とこなしてきたと思いますが、めでたく入学したのは、ちょっと立ちどまって、自分がなぜ外国語を、中でもとりわけ英語を学ぶ必要があるのか、というような根元的な問題について考え、その上で自分が何をどう学ぶべきかを考えて欲しいと思います。以下皆さんが考えたり、学んだりする助けとなるよう選んだ書籍をいくつかのテーマにわけて紹介しますが、これらはほんの一部に過ぎません。これをきっかけとして、さらにいろいろ読んでください。

<「英語」を学ぶということ>

おそらく、ほとんどの学生は、遅くとも中学生のときに、いやもおうもなく英語学習を始めさせられていることでしょう。なんで、学ばなくちゃいけないの？と思うことすらなく。そして大学入学までにひたすら、単語を暗記させられたり、文法を覚えさせられたり。入学して、ちょっと小休止…と思えば、高校までの英語では使い物にならない！グローバルな時代にはコミュニケーション（読んだり書いたりすることもコミュニケーション行為ですが、なぜか「会話」だけがコミュニケーションとして想定されている）が大事だ！と言われてまた英語学習が始まります。

しかし、大学生になったら、外国語をなぜ学ぶのか？学ぶことで何がどうかわるのかを考えて欲しい、いや、外国語に限らず、言語を学ぶということは、「自分」とどう関わっているのかを考えて欲しいと思います。今や、世界中の人がグローバル市場の「スタンダード」に合うよう、英語を学ばせられているわけですが、それによって何が変わるのかを一旦は立ちどまって考えることが必要で、入学直後の今はもっともそれに適しているときです。そして、さまざまな言語の視点から英語を眺めるということは、英語という言語を相対化する意味でも必要でしょう。英語教員がこんなことをいうのは変かもしれませんが、外国語は英語だけではなくいろいろあるわけで、比べてみて、英語に魅力を感じないならば、他の言語に乗り換えてもいいのではないのでしょうか？

1は、言語と権力の関係性について考えさせてくれるものです。2は英語が中心になるということがどういう結果をもたらしているのかということについて考えさせてくれます。3は元来小さな島国の言葉が「グローバル」な言語に成長するまで、どんな歴史があったのかを教えてください。その歴史を知ると言語と政治、経済の関係性についてもより深く考えることができるでしょう。また英語では綴りと発音とが一致しないものが多いのはなぜだろう？というような素朴な疑問もこれを読めば解消できます。4はさまざまな言語の魅力を教えてください。初習外国語を選択する際の参考にもなるでしょう。

1. 藤本一勇『外国語学』岩波書店、2009年。
2. 津田幸夫『英語支配とことばの平等』慶應義塾出版会、2006年。
3. 寺澤盾『英語の歴史』中央公論新社、2008年。
4. 黒田龍之介『もっとにぎやかな外国語の世界』白水社、2014年。

<英語の「学び方」>

常に英語教育について耳にするのが、「日本人は英語を6年やっても話せない、日本人教員の英語の教え方が悪いのだ！」という日本式英語教育批判。「ネイティブ・スピーカーによるイマージョンがいい！」という意見もよく聞かれます。しかし、日本人が英語が苦手なのはちゃんと理由があるのです。日本人にあった学習法を考えることも必要で、ある教育法が世界中の誰にとっても効率がいいというわけではありません。文法構造が似ている言語を第一言語としている人が英語が学びやすいのは当然のことで、その人たちに用いられている学習法が日本人に適しているとは限らないのです。

明治時代は日本が経験するグローバル化の第一波であります。そのとき日本人はどうやって英語を学んだのでしょうか？海外へ出ることなく日本にいながらにして英語の達人になった人々は、どうやって達人の域に到達できたのでしょうか？先人に学ぶべきところもあるのではないかと思います。1は外国語学習の方法論について平易に書かれた本です。英語、今まで得意じゃなかったんだよなあ……という人は、これを読んで学習法を見直してみるのもよいでしょう。2は明治時代以降日本人で政治・外交で活躍したあのひと、医学で名を残したこの人が達人と呼ばれる域に達するのにどんな学び方をしたのかについて面白く書かれたもの。達人たちも、日々の努力でその域に達しているわけで、その小さな努力は誰にもできることです。凡人にできないのはそれを日々続けることですが、でもその小さな努力はあなたにもできる！・・・ということは達人も夢ではありません。

1. 白井恭弘『外国語学習に成功する人、しない人』岩波書店、2004年
2. 斎藤兆史『英語達人列伝』中央公論新社、2000年。

<英語を「話す」・「聞く」>

「話す」・「聞く」の学習に関しては、まず、よく「聞ける」ことを目指して欲しいという気持ちがあります。というのも、短期留学プログラムに参加した学生からよく聞くのは、街の人にインタビューをするという課題を与えられたとき、質問は予め用意するのでなんとかあったが、その質問に対する相手の答えが聞き取れず残念だったということだからです。そう、人に道を尋ねることができても、相手の言っていることが聞き取れないのでは、尋ねる意味がないのです。そういうわけで、「話す」スキルの向上も大事ですが、まず、「聞く」

スキルの向上に努めて欲しいと思います。

そのために効果的な学習法は何か？ よく学生から尋ねられるのは、「テレビで宣伝している「聞き流すだけであなたも聞き取れるようになる、話せるようになる!!!」というのは本当ですか？」という質問です。効果がないとは言えませんが、決して効率のよい方法ではありません。私が奨めるのはシャドーイングという方法で、これは「聞く」だけではなく「話す」ことにも効果があります。

1は発音についてこれぐらいは知っておきたいという基本的なことが簡潔にまとめられているもの。2は音読やシャドーイングがなぜ効果があるかを科学的に説明したもの。ちゃんと効果があるかどうかを知りたいひとは、まずこれを読んで自分を納得させるといいでしょう。3はシャドーイング初学者向けに書かれており、自習に向いています。

1. 英語音声学研究会『大人の英語発音講座』日本放送出版協会、2003年。
2. 門田修平『シャドーイング・音読と英語コミュニケーションの科学』、コスモピア株式会社、2015年。
3. 鳥飼玖美子監修『はじめてのシャドーイング』学習研究社、2003年。

<英語を「読む」・「書く」>

近年、実際に授業をおこなっていて感じるのが、「書く」力の低下です。「カタコト英語」のような文章を書く学生が増えていて、文法無視の他、動詞の不規則変化の間違い（たとえば“had”ではなく“haved”!?）、中学生でも間違えないであろうような綴り間違い（たとえば“remon”）が散見するようになりました。オーラル・コミュニケーション重視の流れで、自分が会話で使用しているとおりに書いているのであろうと推測されます。以前ならば、「読む」こと、「書く」ことを通して、会話におけるこのような発音や文法の間違いは訂正されたものですが、今は「読む」・「書く」機会がきわめて少なくなっており、いったいどこで正されるのか心配なところです。また、学生が書いた作文でもうひとつ気になるのが、論理構造です。英文自体はおかしくないけれど、全体を通して論理的でない、文と文とのつながり、段落と段落のつながりが欠けているといった作文が多いのです。大学では「読む」こと、「書く」ことを通じて「論理」をしっかりと身につけてもらいたいところです。

1は多読と精読との組み合わせで英語を読む力を向上させる方法について書かれたもの。論理をどう把握するか、またどう行間を読み解くか、を平易な言葉で説明しています。2は本学の英語科で作成したアカデミック・ライティングの教科書です。論文の書式、タイトルのつけ方や文献リスト作成といった基本事項から、論文の構成に至るまでをコンパクトにまとめてあります。3は文章全体の構成も含めて、論理的に英語を書くための方法が丁寧に説明されています。

1. 行方昭夫『英文の読み方』岩波書店、2007年。
2. 一橋大学英語科『英語アカデミック・ライティングの基礎』研究社、2015年。
3. 崎村耕二『論理的な英語が書ける本』大修館書店、2009年。